



良い子とはいったいどんな子？

本稿では『良い子の育て方』について、その具体的な方法に迫りたいと思います。良い子の基準や観点については、皆さんなじみの深い通知票を基にして話を進めます。通知票の「行動や性格の記録」と所見欄には、評価の観点や基準が示されています。これを見ると「良い子」の基準は寛容性や公正、公共心など、多様であり多岐にわたっています。しかし、そうした基準の根底にあるのは「他を思いやる心」であると言えます。「他を思いやる心」は情緒、寛容、公共、公正など、豊かな社会生活を営む上で重要な素養の源泉でもあるのです。従って、ここで取り上げる「良い子の基準」は「他への思いやりにあふれる子」として話を進めます。



『他を思いやる心』は、なぜ、
社会生活で重要な要素なのか

その理由は実に簡単で明快です。他人への思いやりに溢れた心があれば、悪口を言ったり、いじめたりして他人を傷つけることはないからです。「思いやりの心」は健全で穏やかな世界を形成するために欠かせない人間としての基底的素養なのです。私たちは一人では生きていけません。他と協調して生きるためには、多様な価値を認め、「思いやる心」が何よりも大切です。

もし、私たちが思いやりにつけ、自分さえよければとの思い(自己中心的)でいたならばどうなるでしょうか。お互いに怒りや憎しみが増幅し、相手を攻撃してしまいます。そのような世界では争いが絶えず、幸福で平和な世界とはほど遠いものになってしまいます。また、思いやりのない言動により、周りの人から「あの人は思いやりのない、自己中心的な人だ」と思われ、信頼され、尊敬されることはないでしょう。それどころか嫌われたり疎まれたり、憎まれたりし

てしまいます。結局、自分自身を苦しめ、孤独になってしまうのです。このようなことから、思いやりにあふれた良い子を育てることは、平和で穏やかな社会を実現するためには欠かせない、私たち大人の大きな責務でもあるのです。

どついたら、「良い子」を
育てることが出来るのか

例えば通知票の「行動(や生活)」の記録「欄のすべてに、○やA評価を得るにはどうしたらよいでしょうか。まずは、我々大人が自己中心的な身勝手な考え方から脱却することです。「親の背を見て子は育つ」との格言にもある通り、教育上最も効果があるのは親の姿なのです。少しでも「自分は、やや自己中心的かもしれない」と自己批判できる人ならば大丈夫。なぜなら自分勝手に自己中心的な人に自己批判はできません。

よく見かける親子の姿で、バスや電車の中で、わが子が他の迷惑になるような行動をした場合、子どもを叱責し相手に謝れるでしょうか。これができるならB判定。放置ならC判定。A判定は、迷惑になる行動はしない子の親、となります。C判定の親は迷惑行為の認識がないので、客観的には自己中心的と思われるのです。

そういう私も、最近、歳のせいか「自己中」気味になることがあり反省しています。子育て中の皆さんには、自分そっくりの人間が出来上がることを想定して、我が子の見本になるよう努力しましょう。では、具体的にどうするか、次号でお話ししたいと思います。

